



後悔だらけの 在宅支援

僕は、これまでたくさんさんの失敗をしてきました。

もちろん、嬉しかったこともたくさんありましたが、後悔のほうが多いです。言い換えれば後悔したケースがそれだけ印象深く残っているということかもしれません。

介護の仕事をはじめ きっかけ

平成7年にデイサービスセンターの生活指導員として勤めたのが、今の介護の仕事の始まりです。仕事を始めて間もなく、中学時代の恩師に名刺を持って

新連載

認知症の人が
最期まで「生ききる」暮らしの支え方 **1**

川野さん(仮名) ごめんなさい **1**

鹿児島で小規模多機能の代表を務める黒岩尚文さん。法人の理念の1つが、「その人らしく最期まで生ききる暮らしを支援する」です。本連載では、黒岩さんの経験をもとに、最期まで「生ききる」暮らしの支え方をお伝えします。

文 | 黒岩 尚文 (共生ホーム よかあんべ 代表)

挨拶に行きましたが、「生活指導員？ お前が指導されんといかんどが！」と一喝されたことを今でも覚えています。

最終学歴は、表向きは福岡大学商学部。でも実態はアルバイト学部お好み焼き学科卒業です。4年間ひたすらお好み焼きを焼いていました。

そして、就職したのは不動産

会社。たくさんの人と出会いたい、料でいなせな不動産屋を目指し、上京しました。しかし、鹿児島弁と博多弁の入り交ざったおかしな言葉しか使えないことがバテて、すぐに福岡支店に移動させられました。仕方ないです…。それから数年、不動産やリゾート会員権の営業に明け暮れました。

川野さんは、「おほんな、いけんすや、好かんでも○○や！あたいや、好かんてな、〇も見せん」と毎回送迎車から歌いながら降りてこられます。みんなの前で滑稽な踊りや歌を披露し、みんなが笑うとさらにその踊りは調子づいて、キレも良くなります。

川野さんとの出会いは平成7年5月。川野さんは認知症でした。その当時は痴呆症と言われていました。子供が二人いたら

初めて出会った 認知症の川野さん

その後、身体を壊し、鹿児島に帰り、何の資格もない私を拾ってくれたのが、保育園の理事長先生です。「子供とお年寄りが日常的に触れ合う場所を作りたい」という理事長の熱い思いに感動し、就職させていただきました。

福祉の「ふ」の字も知らず、ただ楽しさだけを求めてこの仕事について、もう19年。若く、飛び跳ねていた生活指導員も、今ではすっかり「おっさん」の領域に入りました。



人が利用できるように、週1回と制限されていました。

●お風呂に入ってくれない！

僕たちにとつて、「川野さんは歌の好きな陽気なおじさん」というのが第一印象でしたが、一緒に暮している奥さんにとつては、「お風呂に入ってくれない」ことが悩みになっていたようです。奥さんが自宅でお風呂に誘うと嫌がり、服を脱がそうとすると「お前は女のくせに男の服を脱がすとはなんか!!」と怒り出す。温泉なら入ってくれんじやないかと息子さんが連れていくと、やはり脱衣場で大声で怒り出すと、かなりご家族は困っていたようです。確かに歌はうまく歌われますが、会話はつながりませんでした。しかし、奥さんは「認知症はあるけど、これまでお父さんには大事にしてもらった。これからは大事にしてもらいたい」とおっしゃっていました。

いのか全くわかりませんでした。奥さんの希望になんとか応えたい、必死になりましたが、必死になればなるほど本人の怒りを買うばかりです。結局、僕の気持ちを「お風呂に入ってほしい」、さらには「お風呂に入りたい」にどんどん変わっていったのです。



しやいましたが、それぞれ独立して商売をされており、奥さんと二人暮らし。鹿児島弁で言う「よかにせ」、地域でもちよつと有名なモテ男だったと、80歳代のおばあさまたちが言われるほど、ハンサムな方でした。

●措置時代のデイサービス

当時のデイサービスは、介護保険前ですからまさに措置時代です。民生委員に紹介状を書いてもらい、役場に申請書を出して、許可が出れば役場が指定した町内のデイサービスに行けるというシステムでした。介護度はもちろんありませんから、順番がくれば利用できる仕組みです。さらに、少しでも多くの

●デイサービスでの試行錯誤

そんな川野さん、デイサービスでもお風呂に簡単に入るわけがありません。僕も初めて接する認知症の方で、どうしたら良

そのようなことが3か月ほど続き、「そのままじゃもつとお風呂が嫌になるし、僕たちのことも嫌いになるだろう」と思い、お風呂のことは抜きにして、もつと川野さんに自分を知ってもらおうと思いました。一緒にいる時間をたくさんつくりました。川野さんは、うつとおしいと思つたかもしれません。ある日、二人きりでドライブに行きました。歌と一緒に歌いながら町内をドライブし、スーパーに寄つて一緒にオレンジジュースを買つて飲みました。あのオレンジジュースの味は今でも忘れません。そして、また一緒にデイサービスセンターに帰り、そのままお風呂場に行きました。「川野さん、一緒にお風呂に入らましようよ」と先に僕のほうから服を脱いで入りました。すると川野さんも「そうね」と言いながら自分で服を脱ぎ、一緒に入ってくださった

のです。お風呂に一緒に浸かりながら、「いい湯だな」を歌いました。しばらくすると、「シヨンベンをしよう」と言われたので、「上がつてトイレに行きましようか?」とお誘いしましたが、「こで良い」と排水溝めがけてシャワー。「お前もせんか!」と言われるので二人並んでシャワー。最高の連れシヨンでした。あの時のことは今でも鮮明に思い出されます。

「ヨッシャー!」とスタッフみんなまで感動し、これからはもつと楽しみにになると感じた瞬間でした。

しかし、この出来事も後から思えばつかの間の喜びでした。